



みどり かわ
碧川 かた
Kata Midori Kawa
1872(明治5)-1962(昭和37)



た なか
田中 たつ
Tatsu Tanaka
1892(明治25)-1985(昭和160)



よしだ きくよ
吉田 喜久代
Kikuyo Yoshida
1914(大正3)-1990(平成2)



やまね としこ
山根 敏子
Toshiko Yamane
1921(大正10)-1956(昭和31)



お さき みどり
尾崎 翠
Aoi Ozaki
1896(明治29)-1971(昭和46)



た なか こよこ
田中 古代子
Koyoko Tanaka
1897(明治30)-1935(昭和10)



はな ふさ てる こ
花房 照子
Teruko Hanafusa
1928(昭和3)-1996(平成8)



ふくもと こ
福本 まり子
Mariko Fukunoto
1952(昭和27)-



さわだ みき
澤田 美喜
Miki Sawada
1901(明治34)-1980(昭和155)



た なか はな こ
田中 花子
Hanako Tanaka
1901(明治34)-1984(昭和159)



まへ たふじこ もりもとあきこ やまね やえこ
前田藤子 森本明子 山根やえ子
Fujiko Maeta Akiko Morimoto Yaeko Yamane

1982(昭和157) 提訴



なか た まさこ
中田 正子
Masako Nakata
1910(明治43)-2002(平成14)



こん どう ひさこ
近藤 久子
Hisako Konno
1911(明治44)-2004(平成16)

時代を切り拓いた鳥取ゆかりの女性たち

Pioneer Women
in Tottori

作成：鳥取県男女共同参画推進会議



写真提供：霞城館 龍野市

婦人参政権に奔走 露風との母子愛切々

みどり かわ
碧川 かた
Kata Midorikawa
1872(明治5)~1962(昭和37)

かたは明治5年10月10日鳥取藩池田家
家老の和田邦之助信且とみねの次女として
生まれ、その後重臣の堀正と千代の養
女となり養父の転居に伴い高知や龍野へ
転々とする。

15歳で龍野の名門三木家の節次郎と結
婚し、操(後の詩人三木露風:童謡『赤とん
ぼ』の作詞家)・勉の二児が生まれた。厳格
と慈愛にあふれ教育熱心に子育てをする
も遊び人の夫から離婚を言い渡され勉を
連れ三木家を去る。

鳥取に帰ったかたは自立を目指し東京
帝国大学医学部付属病院看護婦養成所へ
入所。上京に同行してくれたのが東京専
門学校に入学する碧川企救男であった。

明治35年正看護婦となったかたは北海
道で記者をしていた企救男と再婚し1男
4女が生まれた。

しかし地方記者は収入が乏しく生活の
再起を図り明治41年に上京、企救男は「中
央新聞」の主筆になった。

そしてイギリスで見聞した婦人参政権
運動などの様子を手紙で妻に知らせた。
これが権利も発言権もない女性の惨めさ
を離婚で体験したかたに火をつけた。

かたは婦人参政権運動への挑戦を決意
し、「女権社」を結成したり参政権を獲得す
るには女性弁護士の養成が必要と考え若
い女性たちを誘い明治大学法科の聴講生
になるなど精力的に活動。

第二次世界大戦に突入するとかたの家
族も混乱に巻き込まれ苦労を重ねるが、昭
和20年終戦後の12月に改正された衆議院
議員選挙法が公布され、ついに女性も参政
権を獲得した。



国連会議場にて 西田信子所蔵

日本初の女性外交官

やま ね とし こ
山根 敏子
Toshiko Yamane
1921(大正10)～1956(昭和31)

大正10(1921)年11月14日、鳥取市出身の北海道帝国大学助教授の山根甚信と茂世夫妻の次女として北海道で生まれ、小学校4年生の時に父親が台北帝国大学教授となり、一家で台湾に渡る。

台北州立第一高等女学校卒業後、東京の津田英学塾(現津田塾大学)に入学し、得意の英語に磨きをかけ、昭和16年、太平洋戦争の勃発で繰り上げ卒業し、翌年台北帝大文政学部に入學。

昭和19年12月には、台北帝大を繰り上げ卒業となり軍司令部情報班で働き始める。

終戦後の昭和23年、一家で台湾から引き揚げると鳥取県教育委員会に就職、敏子の鳥取での生活が始まる。米軍との交渉が常に必要だった占領下において、激務を一人で黙々とする敏子の姿はとても印象的だったと当時の関係者は話している。

昭和24年秋、日本で初めて女性にも応募資格が与えられる外交官試験の公募が行われ、採用者12名に対して応募者千数百人という狭き門ながら、ただ一人の女性として見事合格をはたした。

昭和26年11月から10ヶ月間の外務省勤務の後、外務官補として駐米大使館付を命ぜられ、昭和27年ニューヨークの国連日本政府代表部勤務となる。

国連創立10周年記念の特別総会がサンフランシスコで開かれたときも、当時の澤田廉三初代国連大使(岩美町出身)にただ一人随行する。

昭和31(1956)年8月24日、帰国のために搭乗した飛行機がアラスカ上空で墜落し、敏子は34歳という若さで亡くなる。敏子が望んだ国際連合への日本加盟が決まったのは、敏子の死から3ヶ月後のことであった。

3回忌となる昭和33年、敏子の思いを将来に繋げ、世界平和の確立に貢献する人材を育成することを目的に「山根奨学基金」(2012年より「一般社団法人山根奨学基金」に移行)が、大使の北原秀雄氏、国連日本政府常駐であった澤田廉三顧問、外務省関係者が発起人となって設立された。

参考 とつとりの女性史 戦後からの歩み 2006鳥取県鳥取市人物誌 きらめく120人。2010. 鳥取市鳥取NOW 45号。1999. 鳥取県去りぬるを。山根甚信編。1957